Honda の交通安全情報紙　SJ 2018 年 8-9 月号（No.491）8 月 21 日発行

08-09 2018 AUG.SEP.

SJ

The Safety Japan since 1971

Close Up　クローズアップ　福祉安全運転

自動車教習所と作業療法士が連携を深め、熊本県内で運転復帰支援環境の輪を拡げる

Honda は「より多くの人にクルマを操る楽しみを提供したい」「交通社会に参加するすべての人の安全を守りたい」という理念のもと、お身体が不自由な方々の交通社会復帰に向けた安全な移動手段の確保のために教育機会を提供している。さらに、各地域が自立して運転復帰プロセスを構築できるように、自動車教習所や病院施設などを支援している。昨年の沖縄県に続き、今回は熊本県における自動車教習所と作業療法士の連携に向けた取り組みについて紹介する。

パイロンスラロームなどで複数の課題（指定された速度を維持しているか、適切なハンドル操作ができているかなど）を同時に遂行できる能力を評価

合同講習会では、教習指導員と作業療法士が病院施設での運転の再開に向けた評価・訓練の実態や、自動車教習所の受け入れ体制などについて情報や意見を交換

運転の再開に向けた相談や評価を行う環境づくりをめざして

高次脳機能障がいなどの方々が運転を再開できるかどうかの評価には、実車による運転評価が効果的であると考えられている。しかし、病院施設や自動車教習所においては共通の基準、評価手法、訓練ノウハウなどがないといった課題がある。このような課題を解決し、高次脳機能障がいなどの方々の運転再開支援とともに道路交通の安全確保も推進していくためには、自動車教習所と作業療法士の相互理解と連携が必要不可欠といえるだろう。

Honda は熊本県内で自動車教習所と病院施設との連携を支援するため、（一社）熊本県指定自動車教習所協会と（一社）熊本県作業療法士会に「障がい者（おもに高次脳機能障がい）の自動車運転能力評価環境充実に向けた合同講習会（以下、合同講習会）」の共催をはたらきかけ、6 月 10 日に開催された。

熊本県指定自動車教習所協会専務理事 佐藤正泉さんは「高次脳機能障がいからリハビリを経て運転を再開したいという相談が増えていますが、教習所側に高次脳機能障がいに関する理解が進んでいませんし、対応するためのプログラムも整っていないのが現状です。合同講習会をきっかけに、まず一歩を踏み出そうと考えました」と話す。一方、熊本県作業療法士会会長 内田正剛さんは「私たち作業療法士が受け持つ領域は対象となる方に必要な生活行為を保証することです。自動車運転も、その方の活動や社会参加をサポートするために必要な行為ととらえています。『運転と作業療法』や『運転免許制度』に関して、もっと勉強していく必要があると考えていたので、この合同講習会を実現できたことはありがたいと思っています」と開催の意義を語る。

双方が持っている情報を共有し、連携に向けての課題を探る

合同講習会の会場となった菊陽自動車学校（熊本県菊陽町）には、熊本県内の 15 の自動車教習所と 45 の病院施設から教習指導員等 31 人、作業療法士等 45 人が集まった。まず、熊本県作業療法士会保健福祉部理事 今田吉彦さんが「病院施設における自動車運転相談の現状と課題」を説明。高次脳機能障がいの症状の特徴や回復までの経過、病院施設で行っている検査内容を紹介した。次に、熊本県指定自動車教習所協会講習課長 安永順治さんが「一定の病気に関する免許手続きの

Contents

P1　Close Up クローズアップ 福祉安全運転
P2　Close Up クローズアップ 交通教育センター
P3　Safety Report セーフティルポ 若者
P4　Safety Report セーフティルポ 子ども①
P5　Safety Report セーフティルポ 子ども②
Safety Info. インフォメーション①
Safety Info. インフォメーション②
P6　SJ Interview　埼玉大学大学院理工学研究科教授 久保田尚さん
P7　TRAFFIC SCOPE
P8　危険予測トレーニング（KYT）
SJ クイズ

Safety for Everyone

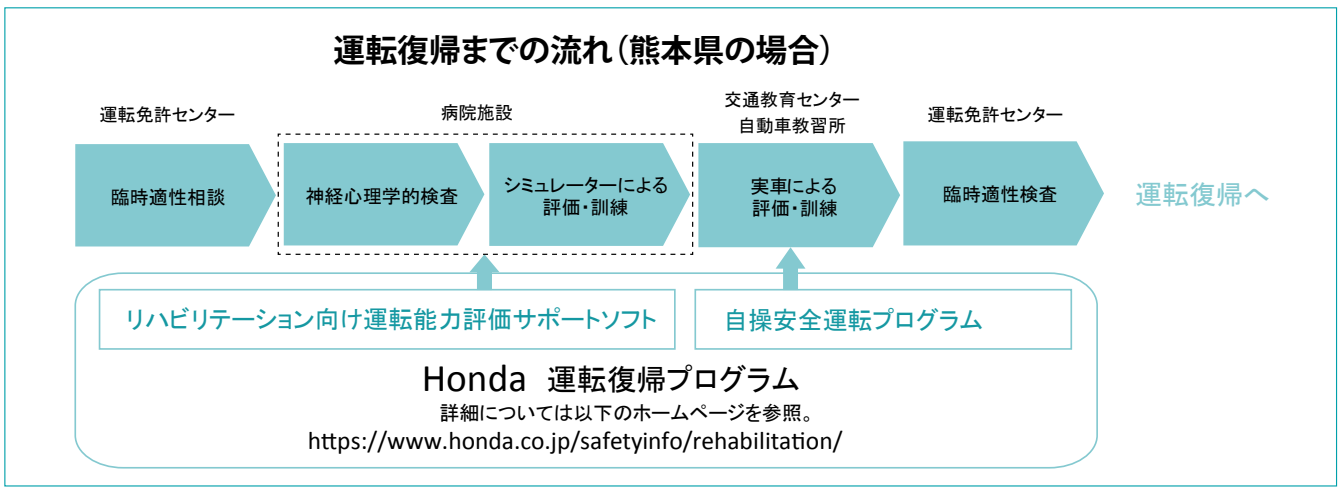
Honda はすべての人の
交通安全を願い活動しています。

SJ ホームページは　ホンダ　SJ　検索

編集室：本田技研工業株式会社 安全運転普及本部内
〒 107-8556 東京都港区南青山 2-1-1
TEL：03(5412)1736
https://www.honda.co.jp/safetyinfo/
編集人：中嶋英彦

※ご不明な点がございましたら、下記までお問合わせください。
㈱アストクリエイティブ安全運転普及本部係
TEL：03(5439)1191
E-mail：sj-mail@spirit.honda.co.jp

法的内容」について解説。法律で定められた運転免許制度の仕組み、一定の病気がある場合の免許更新の条件や申請の流れを伝えた。
この後、作業療法士が患者役となり、教習指導員が助手席に同乗して Honda が開発した「自操安全運転プログラム（以下、自操プログラム）」を体験。このプログラムは、実車運転時における現状の把握、そこから見えた課題に対する訓練を目的として Honda の交通教育センターで実施している。体験で使用する車両には、手でアクセルとブレーキを操作する補助装置や、左手・左足だけでハンドル、アクセル、ブレーキを操作する補助装置が付けられている。講師を務めた交通教育センターレインボー熊本の黒澤明良インストラクターはパイロンスラロームなどの課題を通じて、指定された速度を維持しているか、適切なハンドル操作ができているかなど、その方の現状をまず把握することがポイントであると教習指導員と作業療法士に説明した。最後に、地域ごとのグループに分かれ、病院施設での運転の再開に向けた評価・訓練の実態や、自動車教習所の受け入れ体制などについて情報や意見を交換するなど、双方が交流する場も設けられた。参加者からは「教習所の考え方や受け入れ体制を学ぶことができた」「講習会の開催回数を増やし、意識改革を図る必要がある」といった声が聞かれた。
熊本県作業療法士会の内田さんは「生活行為をみる私たちと、運転のプロである教習所が連携を深め、事例をつくっていくことはたいへん意義があります。さらに、事例を積み上げて実績にしていくことで今後、行政の協力も得られるようになると思います」という。熊本県指定自動車教習所協会の佐藤さんは「今回は教習指導員だけでなく、教習所の管理者も多数参加しており、それだけ関心が高まっているといえるでしょう。県内を４つのブロックに分けているので、各々で受け入れ体制を整備したいと考えています。熊本県作業療法士会との連携をさらに深め、取り組んでいきたい」と語った。今後、県全体、さらに地域単位でも連携が進んでいくことが期待される。



（一社）熊本県指定自動車教習所協会専務理事 佐藤正泉さん（左）、（一社）熊本県作業療法士会会長 内田正剛さん（右）

Close Up　クローズアップ　交通教育センター

バイクに乗る体験を通じて親子の絆を深めてもらう

「親子でバイクを楽しむ会（以下、親子バイク）」は Honda のバイクのスクールの１つで、バイクに乗る体験を通じて親子の絆を深めてもらうことを目的としている。保護者が先生となり、バイクの操作方法や楽しさだけでなく、ルールやマナーの大切さを子どもに伝える。参加資格は自動二輪免許（小型以上）を保有している保護者とその子ども（自転車に乗れる小学生）。親子バイクを開催している鈴鹿サーキット交通教育センターの平井真所長は「小学生の時にバイクの楽しさを知ってもらっても、中学生以降は 16 歳で免許を取得するまでバイクに乗る機会がなくなってしまいます。継続してバイクを楽しめる機会を提供しようと、小学生の時に親子バイクの受講経験がある中学生も受け入れることにしました」と説明する。
７月 14 日、鈴鹿サーキット交通教育センターで親子バイクが開催され、中学生を含む 11 組の親子が受講した。この日はセカンドステージ（エンジョイコース）。子どもたちはファーストステージ（親子で入門コース）を経験しており、１人でバイクの操作ができるようになっている。オリエンテーションでは、子どもたちがその日の目標を一人ひとり発表し、インストラクターが「人の話をよく聞く」「自分のことは自分でする」「人に迷惑をかけない」という３つの約束を再確認。その後、コースに出て、トレーニングが始まる。親子でブレーキングやパイロンスラロームといった課題に取り組む。

スクールによって親子の信頼関係が強まる

小学１年生の時から受講している岩﨑颯馬さん（中 1）は一番身近にいる人にバイクの運転を教えてもらえることがうれしいという。「50cc からスタートして、今はクラッチ操作が必要な 125cc のバイクを運転できるようになりました。これも父の指導のおかげです」。父親の篤さんは「普段の生活とは違う環境の中で親子の絆を築くことができますし、どのように伝えたら、子どもが納得してくれるのか考えることも親として勉強になります」と話す。
参加者の今井聡さんは「安全が確保された場所でバイクの運転操作を学べることが親子バイクの魅力です」と話す。息子の翼さん（中 1）は「最初は言われたことをそのままやることで精一杯でしたが、最近では自分で考えてコースに合わせた操作ができるようになりました」と小学４年生での初受講からの成長を実感している。
今回が２回目となる吉田誠さんは「バイクが好きな人なら、一度は子どもとツーリングをしたいと思うはずです。親子バイクはそれが少しだけ叶えられる場所であり、すばらしいことだと思っています」と話す。娘の愛菜さん（中 1）は「バイクに興味はありましたが、一人では参加する気にはならなかったと思います。始まる前は緊張しましたが、父がそばにいてくれるという安心感があり、楽しい気持ちになれます」という。
今回が 44 回目の受講になるという塩原肇さんは「子どもがバイクを扱うことによって、バイクの立場が理解でき、日頃の生活の中での交通安全にもつながります」と話す。息子の惺さん（中 1）も「ここで身につけたことは、日頃利用している自転車の安全運転にも役立っていますし、将来、運転免許を取る時にも活かせると思います」という。
このように、バイクに乗る体験を通じて参加した親子の絆はさらに深まったといえるだろう。信頼関係を築きながら、保護者が教えることによって、子どもの安全に対する意識も高まっていくのである。

保護者が先生となり、子どもの運転を観察した後、アドバイスを伝える

パイロンスラロームでは保護者が追走して、子どもの運転の様子を観察

直線を保護者と並走し、目標となるパイロンに合わせて停止する練習

セカンドステージでは交通教育センターのコースを離れ、鈴鹿サーキット内を走行。親子でのツーリング気分が味わえる